

現代日本の建築家のセルフビルドを通じた活動姿勢

奥山研究室 13_14775 森山 敬太 (MORIYAMA, Keita)

1. 序 近年、施主や建築家が自ら建設行為を行うセルフビルド¹⁾(以下SB)による建築作品が増えている。そうした作品とともに提出される建築家の設計論からは、「自分の家を自分でつくるとい健康極まる考えを持って不健康な時代に異議を申し立てている」(図1)として、SBを行うことで工業化の進んだ社会に対して批判を投げかけるもののように、建築と社会の関係性に対する建築家の活動姿勢を読み取ることができると考えられる。そこで本研究では、現代日本の建築家のSBによる作品を資料²⁾とし、その活動内容と設計論にみられるSBを行う目的を検討することで、現代社会に対する建築家の活動姿勢の一端を明らかにすることを目的とする。

2. セルフビルドの活動内容

2-1. セルフビルドの形式 まず資料におけるSBの活動内容を検討する。SBによる施工の範囲と概要をSBの形式として整理し(図2)、躯体施工を含むものと、仕上げのみを行うものに大別した。躯体施工を含むものは、構造形式の違いから、線材の組合せによる〔骨組〕と、構造部材が仕上げを兼ねる〔一体〕とに分類し、さらにそれらが一般的な構造〔一般〕か、特殊な構造〔特殊〕かを検討した。仕上げのみを行うものは、施工業者が躯体の施工を行うものと、既存建物の改修をSBで行うものに分類した。

NO.07 SK8610 開拓者の家 石山修武	…時代に対峙させる家づくりのモデルをつくる。…正橋孝一さんと私が建てた菅原高原の農家は、…自分の家を自分でつくるとい健康極まる考えを持って不健康な時代に異議を申し立てている。…	形式 2章	躯体施工/一体/特殊な構造	工法 2章	土木用建材を転用する (材料/用途の違うものを転用)	目的 3章	時代に対峙させる家づくりのモデルをつくる (生産システムの改変) 建設過程の再考
-------------------------------	--	----------	---------------	----------	-------------------------------	----------	--

図1. 分析例

躯体施工を含む	特殊な構造(32)		一般的な構造(17)	
	〔骨組〕	ヒューム管や鉄パイプによる基礎と躯体(no.05)/紙管構造(no.11)/三角大屋根とアーチ状のトンネルとの2重屋根構造(no.14)合板キットハウス、口の字型フレームの建込み(no.17)/樹木を柱木に用いる(no.19)/アルミアンクルを張弦センサーで繋いだ膜構造(no.26)/接合部をゴムテープで固定(no.40)	地場産材を使った全体施工(no.01)/街の看板や捨てられた空箱で壁をつくる(no.09)/掘り立て小屋構造(no.15)/継手のプレカット(no.45)/日乾し煉瓦3000個をワークショップで製作(no.47)/スキの皮葺き屋根、割った竹で固定した柱、紙製ボイド管型枠基礎(no.54)	〔骨組〕
〔一体〕	レディメイドのパーツのジョイントをボルトとスパンで接合し組み立て(no.02)/構造用合板を張り合わせてパネル化(no.21)/木質腐材の利用(no.24)/間伐材の丸太ユニット(no.28)/合板を曲げて作った弓状ユニット(no.30)/土裏ドームと単管でつくる高床構造、竹で棧をまわし布を巻き付けた内壁(no.58)	改修(11)	〔一般〕	板張り工事や塗装工事(no.35)/木造在来工法での改修、耐震補強(no.37)/木質再生レンジのもの部分的な改修(no.46)/構造補強を含めた全面的な改修(no.49)/ワークショップを基本とした「コミュニティビルド」(no.62)/工場の構修・漆喰塗り、ピンコロ石を軒下につめる(no.66)/既存のものを分解してパーツを再利用、外壁の木を再塗装(no.69)
仕上げのみ	新築(12)	改修(11)	〔特殊〕	屋根ニラ補裁、茶室内装、アトリ工用の家具組み立て(no.18)/荒壁の工程から土塗りまでを行う(no.33)/ストローベイルと泥で壁づくり(no.48)/ラワン合板の家具や花壇の製作(no.50)/釜石産の土の外装、珪藻土の漆喰塗りの内装(no.56)/杉板を焼き、張り合わせた屋根(no.57)/コンクリートの小叩きWS(no.72)

図2. セルフビルドの形式と材料

註：()内は資料番号

2-2. セルフビルドの工法 SBにおいて提案される工法の内容について検討した結果、土木資材の転用などの材料に関する〔材料〕と、接合部の簡便化などの部材の組立てに関する〔組立〕に大別した(図3)。

2-3. 形式と工法の型の組み合わせ 前節で捉えたSBの工法の資料単位での組合せを〔材料〕と〔組立〕の有無から、材料型、組立型、材料・組立型、および工法の提案がみられない従来型から捉えた上で、SBの形式との対応関係を検討した(図4)。その結果、躯体施工を含むものでは、〔特殊〕の〔骨組〕で材料型が、〔一体〕で材料・組立型が多くみられた。また仕上げのみを行うものでは、〔新築〕で材料型が、〔改修〕で従来型が多くみられた。

3. セルフビルドを行う目的

次に、資料とした設計論からSBによって獲得しようとしたことが読み取れる箇所をSBの目的として抽出し、その内容をKJ法を用いて分類した(図5)。その結果、建てることの観点から建築を解釈することや独自の工法を試行することを通して新しい建築表現を模索する「豊かな建築表現の獲得」と、施主や地域住民の協働の機会やそれを通じた共同体としての自覚を提供する「人々の交流の形成」、従来の建築業界の仕組みや建設プロセスを批判的に捉え、その改変の可能性を試行する「生産システムの改変」、施主や地域住民の建築に対する維持

〔材料〕 58		〔組立〕 32	
建材を採集・独自の建材・用途の違うものを転用 17	独自建材 10 / 非建材 17	接合部の簡便化 14	部材の規格化・その他 16
(a) 貝殻、蚕んだい、木、藁、田んぼの土、ピッコロ石	(b) 日乾し煉瓦、土壁、焼き杉	(c) 枕木、間伐材、ニラ、木質腐材	(d) ヒューム管、水道管、ガムテープ、民族衣装
(e) ボルトとスパンで結合	(f) ユニット化、ウッドブロック	(g) 治具の作製、簡単な箇所から施工	

図3. セルフビルドに提案される工法

躯体施工	形式	材料型				材料・組立型				組立型				従来型			
		〔特殊〕	〔骨組〕	〔骨組〕	〔骨組〕	〔骨組〕	〔骨組〕	〔骨組〕	〔骨組〕	〔骨組〕	〔骨組〕	〔骨組〕	〔骨組〕	〔骨組〕	〔骨組〕	〔骨組〕	〔骨組〕
〔一般〕	〔骨組〕	〔骨組〕	〔骨組〕	〔骨組〕	〔骨組〕	〔骨組〕	〔骨組〕	〔骨組〕	〔骨組〕	〔骨組〕	〔骨組〕	〔骨組〕	〔骨組〕	〔骨組〕	〔骨組〕	〔骨組〕	〔骨組〕
	〔一体〕	〔一体〕	〔一体〕	〔一体〕	〔一体〕	〔一体〕	〔一体〕	〔一体〕	〔一体〕	〔一体〕	〔一体〕	〔一体〕	〔一体〕	〔一体〕	〔一体〕	〔一体〕	〔一体〕
仕上げのみ	〔新築〕	〔新築〕	〔新築〕	〔新築〕	〔新築〕	〔新築〕	〔新築〕	〔新築〕	〔新築〕	〔新築〕	〔新築〕	〔新築〕	〔新築〕	〔新築〕	〔新築〕	〔新築〕	〔新築〕
	〔改修〕	〔改修〕	〔改修〕	〔改修〕	〔改修〕	〔改修〕	〔改修〕	〔改修〕	〔改修〕	〔改修〕	〔改修〕	〔改修〕	〔改修〕	〔改修〕	〔改修〕	〔改修〕	〔改修〕

図4. セルフビルドの形式と工法の型

管理能力や愛着の醸成を目指す「人と建築の関係性の構築」という4つの大枠で捉えられ、「豊かな建築表現の獲得」と「人々の交流の形成」が、空間性を追求するか否かという点において、対極的な意味内容として位置づけられる。

4. セルフビルドを通じた活動姿勢 前章で検討したSBの目的の資料単位での組合せは、【表現】、【人と建築】、【生産システム】、【交流】の4つで捉えられた³⁾。それらとSBの工法の型及び形式の対応関係、さらにそれぞれの通時的傾向を検討した(図6、図7)。まず、SBの目的の組合せと工法の型の対応についてみると、【表現】では材料型が、【人と建築】では材料・組立型が多くみられた。これらは独自の材料を製作するなど、新しい表現を獲得しようとするものや、身近な材料や規格化された部材を用いて建築に対する愛着の醸成や建築の維持管理能力の向上を図るものである。一方【交流】では従来型が多くみられた。これは、特別な工法を用いずに人々の交流を誘発させようとするものであり、このことは建築の表現に固執せず、SBを手段として、建設における協働や交流を通して希薄化された人や地域との関係性を構築していこうという建築家の姿勢が現れているといえる。通時的な傾向を鑑みると、これは近年に特徴的な建築家の活動姿勢だといえる。SBの目的の組合せと形式の対応関係についてみると、【表現】では【特殊】が、【人と建築】と【交流】では仕上げのみが多くみられた。これは規格化された部材を用いた特殊な構造形式により、現代において実験的な試みとして施工を行っているものである。さらに通時的な傾向を鑑みると、特殊な構造形式により自身の表現の可能性を模索するものから、SBを通して建築を身近に感じられるようにするものや、共同体における人々の関係性を強化しようとするものへと、建築家の社会に対する活動姿勢が変化していることを示していると考えられる。

5. 結 以上、現代日本の建築家のSBを通じた活動姿勢について検討した。その結果、工業化された社会によって形成された画一的な空間に対する新しい表現を獲得しようとするもの、SBを手段として用いることで人々の交流を誘発しようとするものという、建築家の社会に対する対極的な活動姿勢を明らかにした。

註
 1) 一般的にはSBは「住宅を自分自身で建てること」と、されているが、本研究では「施工に関して専門的な技術のない人が建設行為を行う、またはその一部に携わっているもの」と定義している。
 2) 1949年以降に「新建築」、「住宅特集」誌に掲載された135作品のSBによる作品のうち、SBを行う目的が明確に読み取れる73作品を資料対象として分析する。
 3) 「豊かな建築表現の獲得」と「人々の交流の形成」のうち、前者を含み後者を含まない資料を【表現】、後者を含み前者を含まない資料を【交流】、さらに「人と建築の関係性の構築」のみの資料を「人と建築」、「生産システムの変更」のみの資料を【生産システム】としている。

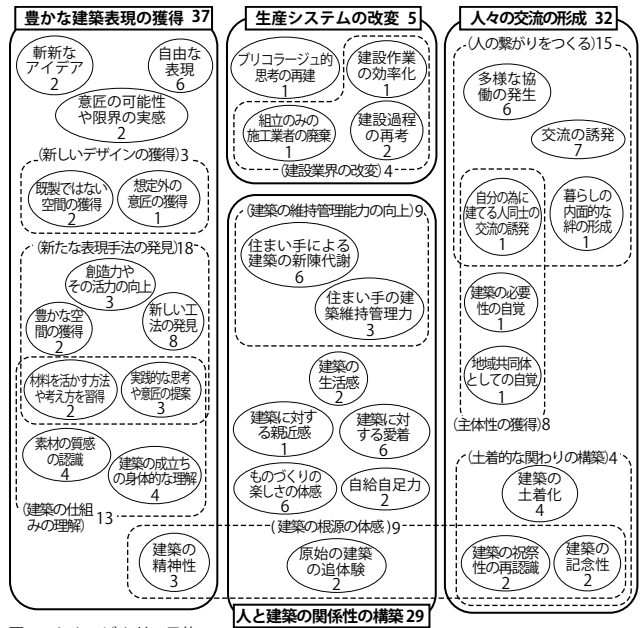


図5. セルフビルドの目的

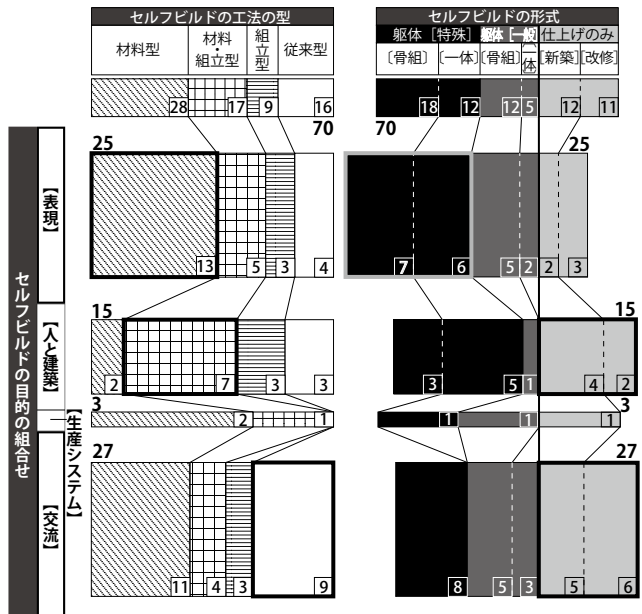


図6. セルフビルドの活動姿勢

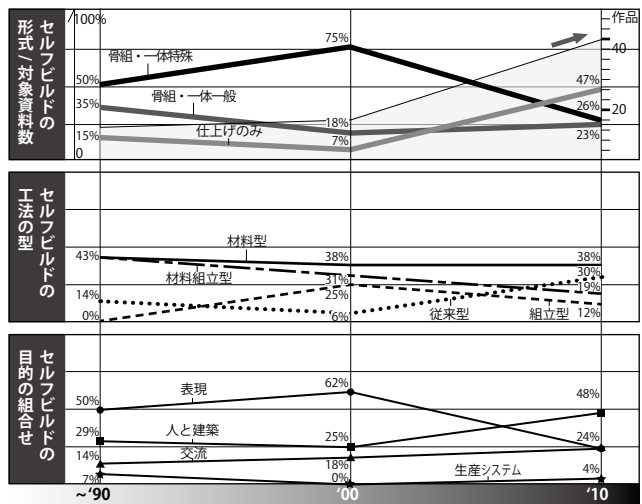


図7. 通時的傾向